
僕らの力の使い方

最近寝不足気味の忍者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの力の使い方

【Zコード】

Z7363X

【作者名】

最近寝不足気味の忍者

【あらすじ】

さあついに始まりました。

最近寝不足気味の忍者がお送りする超厨二病超能力系小説。

「いかがりどのように話が展開して行くのか。

そして、作者のやる気は何日持つのか。

温かい皿で覗かれてこそ。

プロローグ（前書き）

さあついに始まりました。

最近寝不足気味の忍者がお送りする超厨二病超能力系小説。

ここからどうのこうの話が展開していくのか。

そして、作者のやる気は何日持つのか。

温かい田で見守つて下さご。

プロローグ

自分の力は、自分の力。

分かりにくいだろうか？

なら言葉を変えよう。

自分の持つ特別な力は、誰にも犯される事のない、自分だけの絶対領域。

人が持つ無限の可能性への扉。

その力を、何のために使うのか

自分のために使うのか。

仲間同士でもどうにもならない時に使うのか。

他人のためだけに使うのか。

凡人を装い、隠し続けるのか。

その考えは誰にも変える事は出来ない。

しかし、手を伸ばしてあげる事は出来る。

心から。

私はそう信じたい。

dy 作者

問一 なぜ焼きそばパンは早く売り切れるのだろうか（前書き）

答え

「つまいからだりつ」

問一 なぜ焼きそばパンは早く売り切れるのだろうか

「ノーオーダー」
「ノーオーダー」

投稿して一回田で聞き苦しい奇声を聞かせたこと。
深く反省します。

食堂に響く奇声。

しかし、それをまじめに受け止める人間は此処には居ない。
なぜならそれは日常茶飯事だからであつて別にこの生徒達が白状だ
からではない。

この奇声にいちいち反応していたらキリが無いのだ。

そして、奇声を上げた当の本人。
黒髪を肩辺りまで伸ばしそれを黒いゴムでまとめているこの一人の
学生。

「焼きそばパンが売り切れ！……うう」

この学校の三大珍味の一つ。

焼きそばパンが売り切れた事へのショックが、原因だった。

たかがパンと侮るなれ。
なにせこの焼きそばパン。
とても評判で、売り切れ確実。

さらには倍率が20を超えている、超人気商品の一つなのだ

そして、この少年。

牧野 まきの
拳治は。けんじ

「う……う……」

その場で小さく泣き崩れた。

さて、この小説を読んでいただく前に、
この学校のシステムを理解していかないと話について行けない
部分があると願いたい。

なので此処で簡単なこの学校のシステムをお話ししよう。

ここは、世界でも少数が発現する超常現象を引き起こす力を持つも
者、通称『超能力者』の力を安定させ暴走の危険を調査しながらも、
社会に役立てられる法を研究している研究所兼教育校。

超能力者育成専門学校。

その学校に通っている生徒は年齢問わず、誰でも超能力者である。

と、長い説明は嫌われるの「こ」まで、続きは別の機会。

「パン……珍味……焼きそばパアアアアアアアアアアアアン」

う、うるさい。

所変わつて。

此処はここは図書室。

ここにはじく普通の歴史書や参考書、絵本もあるが、他と違うのは過去の超能力者達の能力の記録まで置いてあるのだ。

偽似する能力者のためにこのように提示しているが、意外とこれが評判である。

しかし、その棚に寄り付かず、端の方で小さな書物をもくもくと読む少年が一人。

黒いパークーでフードを深く被っているせいで顔は分からぬ。

本のタイトルは、『招来術の定義と契約』

超能力は細かく分ければ大量にあるが、その中でも武器や守護霊を呼び出す能力『招来術』は、なかなか発現する者が少なく、またコントロールも難しいため、報告例が極端に少ないのだ。

げんに、招来術に関するものはこれを含めて数冊しかない。

しかし、少年はそのすべてを読み終わると、本を閉じ立ち上がる。彼も…いや、彼女もこの物語を描く材料の一人なのだ。

「よ、よし、私もこれから中学生！ …と呼ばれる年齢！

今まで以上にがんばるぞおー！」

と声を張り上げるも、実際は周りの声に全てかき消されて行く。天然茶髪をショートに切り化粧もしていないせいか若干幼い感じがするこの女の子。

そう、この流れで分かる通り、この子も作者が展開する物語の登場人物。

「あ、あの、すいません。

一組つてどこですか…聞こえますよね？ …聞こえて下さい…

…あの」

とthoughts。

数多の人に行き交う場所。

その人達がこの物語と並んでのキャンパスに、どんな絵を描くのか。
それは次からのお楽しみ。

問一 なぜ焼きそばパンは早く売り切れるのだろうか（後書き）

作者「いや～終わった終わった」

主人公「までまでまで」

作「なんだよ、今から飯食おうと思つてんだけど」

主「あんた今日友達に『んじゃ楽しみにして』っていっただろ?」

作「うん」

主「たつた一話で楽しめると思つのか?」

作「うん…………うん?」

主「と言ひ事で、今回は調子に乗つてもう一話投稿しまや」

問一 「人はなぜ約束をやぶるの」（殺

なぜ主人公は面倒事に巻き込まれた

答え「きつと眠かったんだよ（射殺」

業界用語でオイシイって言うんだよきつと

問一 「人はなぜ約束をやぶるのか（殺）　なぜ主人公は面倒事に巻き込まれた

真つ暗な暗闇の中。

そこは人の部屋だった。

正確に言つと、学校内の寮の部屋。

しかし、暗闇とは裏腹に時間はまだ暁過ぎだ。

ならなぜ暗いのか。

答えは簡単でカーテンや小さな隙間を全て閉じているのだ。

もちろん、ただ単にん練炭自殺をしようとか、そんな事は考えてい
ない。

今からする『事』には、部屋を暗くする必要があるのだ。

闇の中から、一人の人物：女。

『ソフィ・ラグラント』は床に刻み込まれた陣に踏み込む。

今この場に

最悪を呼び込むために。
災厄

「でさあ」

所変わり此処は職員室。

せわしなく急がしそうに働く教師達の中に一人は居た。

先に喋つた人物は、作者も認めたくはないがこの物語の主人公、牧野 拳治。

「なんで俺が呼び出されてんの？ 俺何も悪い事してないよ？」

「何もしてないから呼び出されてんの」

「え、なに？ 悪い事しろってそつ言つ相談？ うあ、聞いちやつたよ先生の黒い話…」

「人の話を聞けえ！！」

そして、たつた今拳治に突っ込みを入れたのが、
この学校の数学教師 渡辺 知晃。

「おまえ…自分で単位ヤバいの知つてんだろ？ このままじゃ落第

…」

「でも俺らはこの学校で勉強するのは義務になつてゐるから退学はな
いだろ？」

そう、法律で彼ら超能力者はこの学校で学ぶ事は法律で義務化され

超能力者

ている。

その実態は、力をうまくコントロール出来ない者達の隔離が目的なのだが、その話は、今するべきではない。

「確かに退学は出来ないが自宅謹慎は出来るぞ？」

「謹慎？ 僕学生だよ？」

刹那。

「ふん！」

職員室に突風が吹く。

しかし教師達はまたかと言わんばかりにため息を吐きながら吹き飛んだ資料を拾い始める。

原因は、知晃の能力、『ニアバスター空気砲』

空気系統の能力でも、空気の圧縮に特化した能力でそれを打ち出し相手を吹き飛ばす事も出来る。

食らった本人はそのまま吹っ飛び壁に激突。

「し、死ぬ！ ギヤグパートでなければ死人であるよー！」

ギヤグパート言うな。

しかし、そんな拳治バカを無視して踏みつける知晃。

「バカって言われた！ 拳治って書いてルビはバカだブルロオアアアアアアアッ！！」

「お前うるさい、そして人の揚げ足とるな」

「なんだよ、間違えたのはあんダアアアアアアアアアアアアアツーー！」

そりに踏みつける力を強くする。

ヒールであつたら恐らく穴が開いているだろ？。

「わかつたか？」

「は、はい」

とこ「うギヤグパートはほつといで。

「なんだ、自分もギヤグパートって認めてんじや……」

グシリ

「- „ # \$ % & , (? < % „ > - ! , < + ` ” * = ~ — ! . . . ! .

凄まじく集中しているこの一人。

「…」

「…」

まずは場所の説明からさせてもいいおつか。

こゝは、この学校内の寮の青の寮長室。
寮長室や青などの説明は次の回をまるまる説明に使つのでここで見
てほしい。

次にこの二人の人物から。

上の「…」がこの青の寮の寮長、『秋本 原樹』
あきもと はるき

下の「…」が此処とは違つ赤の寮の寮長『杉崎 歩美』
すぎさき あゆみ

オセロでじこまで集中する人は居ないだりつてこいつへりこ集中している。

現代語で言えば『ガチ』だ。

「…」

「…」

「…クツ」

「やつたー勝つたー！」

どりやら勝者は歩美らしい。

だがしかし、原樹は悔しさが半端ないらしく、白い灰になつてている。

「はいはい、白い灰になつても免除しないから早く出したー！」

「……チツ」

すると原樹は財布から3,000円を取り出し歩美に渡す。
どりやらコイツらは小遣いを賭けて真剣勝負していたらしい。

「ヤターー！ 3・000円ゲーッシー！」

歩美の喜び方は尋常ではなかつた。

しかし、原樹はなんの反応もない。

この女が金の使い方が荒く、また金の田のなさが凄まじいのはもう慣れた。

さすがに最初は驚いた…といつよりは引いたが。

「喜ぶのも良こねど、ちやんと勧えて使えよ」

「え、良こじやん。 もつアタシのお金だし」

「せして無くなつたら俺のところに来ると」

「アリ」

「ふわけんなー。」

「いいじゃん、アンタ、アルバイトしてんだし」

「アルバイトじゃねえよ強制労働だ！」

寮長になると仕事があり、月々少ないが報酬があるのだ。

「ここからここから

「『いいからいいから』…じゃねえ…！」

怒声と共に氷柱が原樹の体から飛び出し、
しかしそれは歩美に当たる事なく窓から外に飛び出していった。
窓が開いててよかつたね。

「残念はずれー、じゃあね」

そう言い残すと歩美はそのままドアから逃げて行った。

残された原樹はその場に座り込むとせつせつオセロを片付け始める。

これが原樹と歩美の成績だ。

もちろん種目はオセロだけではないが主にオセロ。

たつた一勝でも自分を上回った事がさっきの喜びの理由かもしれない」と、原樹はふと思つた。

「……つふ…」

後に、校舎の壁を氷柱で破壊した『テンプレーチャー 温度干渉』の原樹は反省文を書かされたらしい。

「……なぜだ」

ソフィィは陣の中央で立ちちはぐれしていた。

もう既に時間は経ちまくり、足が本当の棒の様にガチガチだ。

陣は淡く光っている。

これは「招来術」か「まくい」です。証拠もある
しかし、なにも起きない、何も出てこない。

招来術師は召還するのが能力ではない。召還したモノと契約を結ぶのが能力である。

時間は深夜近い。

卷之三

二二

するとの事

中心から未知の手がゆごりと伸びてくる。
ドロドロした物に包まれているそれは、天井にギリギリ付くか付か
ないかの大きさだった。

「大きい！魔物の類いか？」

ソフィイがその魔物に触れようとした瞬間。

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

凄まじい轟音とも呼ぶべき声。

召還したソフィイにしか聞き取れない声を放ちながら、ソレは窓に突
撃し外に飛び出す。

「…自我の強い奴だ」

ソフィイは特に慌てる事は無く、同じ窓から飛び出した。

「つたぐ、勘弁してくれよ…」

その後、なんやかんやで知晃に付き合わされた拳治はようやく解放
されたようだ。

しかし、時間はもう深夜。

駄目だ、眠い。

今、催眠術を掛けられればボクッと逝けるだろう。

「でも、こんな時に化物に会つたら」「ああああああ」とか言つんだらどうな~」

『.....』

貴方は、つぶやいた事が現実になつたらどうしますか?

「...」

『...』

「...」

『...』

「...」

『...』

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアツ！」

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオツ！』

この男は叫びました。

問一 「人はなぜ約束をやぶるのか（殺） なぜ主人公は面倒事に巻き込まれた

拳治

「まてまてまてまてまて…！ 何だこの怪物…！ 何だこのドロドロ…！ しかもさつきまで無差別だったのに、へんな女が来てから俺ばつか狙うんだけど…！」

次回の『僕らの力の使い方』は

拳治

「問三 なんで走らなければならぬのか」

入学案内

我校は、超能力者であれば受験無しで通える高校です。

しかし、ここに入学したら夏休み以外、卒業までは家に帰れません。

我校は完全全寮制学校であり、超能力者であれば小学生の年齢から高校卒業までエスカレーター式です。

寮にはそれぞれ色分けされており

白寮
赤寮
青寮
黒寮

この4種類の寮で分けられます。

それぞれの寮には一人ずつ寮長が存在し、教師の代わりに寮内で起きたいたゞこを解決してもらう役割があります。

これは、普通教師よりも仕事が何倍もある我校の教師の負担削減のためです。

問II なぜ走らなければならぬのか（前書き）

答え 止まつたら死ぬから

問三 なぜ走らなければならないのか

スタスタスタ

え？ 今？

全力疾走中さ

「つて じゃ ねえええええええええええええ」

もう既に深夜を過ぎて、校庭で全力疾走する。
そしてその後ろをなんか巨大な人形のドロドロが迫つてくる。

見た目からしたらカオスな光景だが、本人からしたら止まつたら死ぬ、なので全力で書いてマジである。

ちなみになぜドローバーは拳銃を追いかけるのか。

それにはや黒木本角としが言いよこがないたゞり逃げてゐる物を追いかけたくなるうなのだきつと。

「牧野 拳治…」

その様子を事の発端者は屋上から見学していた。
しかし、意外な人物があの怪物と出くわしたものだ。

牧野 拳治

学校でも信頼度が一番高い白の寮。

そしてその寮の彼は寮長なのだ。

しかし、おかしい。

寮長の第一印象。ソレは強ヤ。

青の寮長 秋本原樹は自身の体温を変化させ外に干渉し灼熱と絶対零度を操るという、氷系統の能力最高の戦闘能力を誇る
『テンブラー・チャーブ』
『温度干渉』

赤の寮長 杉崎歩美は自身の重力を操作したり、質量、密度、重量をあらかじめ設定し、

その設定どうりに（素材は鉄物質限定だが）様々な物を生み出す。
『サイコグラビティ』
『質密重操作』

しかし、ソフィーの中では拳治に対する説明書きが白紙なのだ。

いや、それだけでは驚かない。

問題なのは、目撃した者の証言。

曰く拳治は、手から炎を生み出した。

曰く拳治は、剣を生み出した。

曰く拳治は、鋼の体を作り出した。

知っている限りの能力でもこのように応用のきく能力はソフィィは知らない。

「……試す必要がありますね」

自分の成すべき事の、障害となるか。

「 ゼル … ゼル … ゼル …」

完全に息があがっている。
全身が汗だくで気持ち悪い。

しかし拳治は走る。

とにかく走…

『 オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オ』

突然の咆哮。
空気が震えるその咆哮は満身創痍の拳治の体を一けさせるには十分
だった。

「 はあ… はあ… キツ…」

しかし拳治は立ち上がる。
相手の突進に備えて身構える。

「 ……あらあ」

しかし、今までたつてもそれは来なかつた。

いや、相手は走りもしなかつた。

ただ呆然と立ち尽くしているだけだった。

しかし、拳治は再び身構える。

相手の後ろに違う人影が居るのだ。

されば、おのれの御口口づけつかひがいへべせめ後ひを回せば

刹那

『ゴアアアアアアアアアアアアアアア』

田の前のドロドロは拳銃に向かって走り出し、その巨大な拳を横薙ぎに振る。

しかし、巨体だけあつて動きがのろい。

拳治は焦るそのままハシケブテハノで回過する。

「ぬあ！」

拳を振るつた時の風圧で吹つ飛ばされたのだ。

「くそ、もう怒った！」

拳治は腕を前に突き出す。

拳治はならず。

「……あれは

拳治は腕を前に突き出し、指鳴らしの形を作る。
(俗にいう、指パッチン)

拳治は何をする気なのだろう。

指を、

化物に向けて

すると、音は集まり轟音となり。

化物を吹き飛ばす。

『――?』

吹っ飛ばされた本人は訳が分からなかつた。

なぜ自分はこうなつた。

しかし、答えを出す前より早く、化物はこの場から姿を消した。

「…………ふう」

ソフィィは腕を突き出していた。
あの化物をもとの場所に戻したのだ。

化物の力の評価はとても高い。

すばらしい。

しかし問題は拳治だ。

音を操作、風系統の音を操る能力『音響制作者ノイズクリエイター』

しかし、その能力を使っても炎は出せない、剣も生み出せない、体
も硬質化できない。

今のソフィィには答えを出す知恵はなかった。

問二 なぜ走らなければならぬのか（後書き）

拳治

「俺強つーー？」

作者

「なんだ、今度は何が不満なんだ」

拳治

「いや、不満はないけど……」

問四 なぜ後処理は面倒なのだろうか（前書き）

答え 執行中はそんな事気にしないからじゅないの？

問四 なぜ後処理は面倒なのだろうか

こんにちは。
ふるはた いすみ
古畑 泉といいます。

え、誰かつて？

そうですね、初めて登場しますからね。

でも名前が出てないだけで一回登場してるんですよ？

「問い合わせーなぜ焼きそばパンは早く売り切れるのだろうか」のおどりした中学生。

分からないう人は

『あ、あの、すいません。
一組つてどうですか…聞こえますよね？ …聞こえて下さい…
…あの』

と言っていた人です。

今回初めてこの小説に名前が出てきととても嬉しいです。

でもですね、何も書く事がないんですよ。
だって。

「はあ

中学年生一年、古畑 泉は学校の広場でうなだれていた。

せっかくの初登（ゲフンゲフン

せっかく今日は学校自体は休みで授業も無いのにやる事が無い。
せっかくから地面のレンガタイルを数えては止め数えては止め…。

「……暇だなあ

「なら手伝つて

「はあい……はい?」

目の前には、上級生の…
たしか名前が**拳治**バガ…あれ?

「あのさあ……泣くよ?」

なぜ彼が此処に居るのか。

それは数時間前にさかのぼる。

学校の校庭でたたずむ一人。

一人はこの物語の主人公、牧野拳治。

そしてもう片方はこの拳治の担任で数学教師の渡辺知晃。

「……なあ先生」

「なんだ」

「これは?」

拳治は地面に突き刺さる一本の棒を指差す。

「スコップだ」

「そつか

「…俺からも良いか

そう言いながら知晃は地面に開いた大きな穴を指差す。

「拳治…あれは?」

「クレーター」

「なんで学校にクレーターがあんだよ」

先日…と言つより昨日、拳治が能力発動により轟音を出した際。

化物と一緒に地面も捲れ上がっていたのだが。

「で？　この六ぼ」がどうしたの？」

「うむ、それがな」

すると知晃は、スコップを片手に拳銃に近づき、それを手渡す。

「じゃ、たのんだ」

そういうと知晃はそのまま職員室に戻つて行つた。

「……………あ？」

ない。

どこにも無い。

図書室の中、ソフィーは棚を漁っていた。

炎を生み出し、剣を生み出し、体を硬化し、さらには音の増幅も行える超能力の研究資料。

前例がない、それももちろん考えた。

しかし、前例がないならなおさら拳治の実験記録が此処に陳列されているはずだつた。

そもそも能力と言つるのは7系統に分類される。

熱や炎を操る 炎系統

温度調節や水分を操る 氷系統

物質変形や重力操作の 土系統

風力や空気圧縮、雷撃などの 風系統

光量調節やレー・ザー光線の 光系統

陰や暗闇を人工的に作り出したり操作する 閻系統

相手に幻を見せる事しか出来ない 幻想系統

それぞれに長所や短所があり、やれる事が違う。

ソフィイの招来術は闇系統に分類され正式名称は『闇系統招来術部門』

青の寮長、秋本原樹の『テンブラー・チャーバイ・グランピティ温度干涉』は『氷系統温度調節部門』

赤の寮長、杉崎歩美の『サイ・グラビティ質密重操作』は『土系統原子構成部門』

しかし、拳治は……

「お探し物はどうなりですか？」

不意に後ろから声がする。

ソフィイはゆっくり振り返ると、そこには髪、服ともに真っ黒な青年が立っていた。

しかし、ソフィイは相手が分かると興味が無いのかすぐさま検索にもどってしまう。

「おいおいつれねーなあ、もっと言葉のキヤツチボールしようぜー

？」

「時間の無駄です」

「お～怖い怖い」

相手は完全に演技丸出しでそつ言い放つ。
しかしソフィイは完全無視だった。

それにしびれを切らした男は、ソフィイの腕を乱暴に掴むと袖を捲り上げた。

「お前…何を呼び出した?」

招来術士の能力は呼び出した者と契約する事。
そして、契約すると腕に大きな入れ墨が増えて行くのだ。
以前に男が見た時よりも増えているらしい。

「べつに…貴方には関係ありませんよね?」

「まあな…でも、一応俺も寮長なんでな、あんまり物騒な事してると…」

男はソフィイの目の前まで来ると顔をズイッと近づけ。

「つぶすぞ?」

「…………大丈夫ですよ、覚悟はしています」

そうつぶやくソフィ。

それに男は「そつか」と返し、図書室から出て行く。

「…………全てが始まつたら、貴方でもどうにも出来ないのだから」

ソフィは、男に。

黒の寮長、『神崎 真』に小さく呟いた。

「へえ～それは大変ですね」

「うん、大変なんだ。だからもう少し休んでくれても……」

「やでーか」

「…………やつか」

結局なんやかんや三三ながらビビン手を動かし、穴を埋めている拳治を

画面の前の畠わんは誉め讃えてあげて下せー。

ヒヤリと泉は立上がり

「じゃ、私行きますね」

「ん、逝つてらっしゃー」

「…わざとですか?」

そう言つながらの時間は過ぎて行く。

穴はまだ塞がつてしまつない。

問五 なぜいきなり新キャラが登場するのだ?つか(前書き)

答え 作者の陰謀だから

拳治「作者お前」

……ハハ

問五 なぜいきなり新キャラが登場するのだ？

赤寮の寮長は『鈴木 歩美』

「これ扱いは酷いよ……」

青寮の寮長は『秋本^{これ} 原樹』

「せめてルビを取ってくれ

黒寮の寮長は『神崎^{これ} 真』

「……泣くよ」

白寮の寮長は『牧野^{馬鹿} 拳治』

「あ、漢字にグレードアップした」

拳治の未来は明るそうだ。

「こ」は白寮内部の談話室。

分かんない人はハリポタの談話室。

それでも分かんない人は諦める。

ちなみに各寮には、談話室、集団浴場が必ず設備されている。
あとは寮長の申請で増築されたりするがこの白寮は寮長が『申請が
めんどくさい』という一言で全くした事がないため初期装備のまま。

そんな中、『こ』の寮長拳治と。

真新しい制服に身を包んだもう一人の学生。

「とまあ『こ』が談話室で、たいがい『こ』では何してもいいよ。
あ、でも夏にストーブ付けたり、冬に冷房付けたら逝かせるから」

とまあこんな風に怖い事をもう一人に教えている拳治。
べつにカツアゲ現場とかではない。断じて。

簡単に言つと、新しい生徒に寮の大まかな使い方を説明していると
ころである。

「と…あれ、名前なんだっけ？」

するとその新しい生徒は、背筋を伸ばし。

「新しくこの学校に転校してきた『九条^{くじょう}のぼる 登^{のぼる}』です…」

「度重なるクレームを超えた先に新しい境地が…」

「九条^{くじょう}じゃないですし、そんな面倒くさいものには登氣^{のき}しません。
そして分かりにくいです。」

作者はこれに名前を決めた一時間後に気づいた。

とまあそんな」とはともかくとして、新しいキャラクターが増え（殺

新しい仲間が増えて寮のメンバーも若干気になる模様。

「よし、今度は自室を案内します。

付いてきて、嫌なら来ないで

そんな分かりにくく、笑えない冗談を交えながら拳治達は歩いて行く。

キャストは揃つた。

あとは物語。

彼らの進む先にある物は。

鬼か、蛇か。

それは、

書き手も考え中
作者

問六 なぜかんじかくことばは立て続けに起りたのだからか（前書き）

答え 呪われてんだよ、さうと

拳治

「みんなのキャラは全員、呪い持ちか」

問六 なぜめでたしへこ事は立て続けに起るのだからつか

「これは…」

ソフィイは再び闇の中招来術を施行していた。
しかし、そこに現れたのは今まで一番恐ろしく。
しかしそれは生物ではなく。

剣だった。

「はんはんはーん、はんがはーん」

そう上機嫌で歌いながら廊下をあるく拳治。

彼の目的はただ一つ。

一日40食限定、焼きそばパン。

いつもよつよつ早めに購買へ向かうため絶対『一個』は残っているはずなのだ。

まあ倍率が高いため無くなつても文句は言えないのだが。

「……フツ

目の前にはただ一つ残る焼きそばパン。
それを拳治はさつと手に取り。

「あひさてとつとと買つてズラかりましょか、ね？」

拳治の手には焼きそばパン。……と誰かの手。

「……」

「……」

上から下まで真っ黒なその男。

「…またか真。何だその手は」

「お前こやなんだ、その手をぶつた切って捨ててここに」

神崎真も焼きそばパン好きと見た。

「おひからじぱまへは会話だけでお楽しみください」

拳治
「手つて何だ、手にそんな事したらそれ食えなくなるだろ。一の腕

辺りまでぶつた切つて捨ててここ」

真

「食わなくて良いんだ、これは俺が食つから。とりあえず肩辺り
までぶつた切つて捨ててここ」

拳治

「お前何言ってんの？ 先に取ったのは俺だぞ？ とりあえず首」と腕をぶつた切つて捨ててここ

真

「いや、同時だ。第一俺は昨日食いそびれたんだよ、こには俺に
譲れ。 とりあえず上半身含めて腕ぶつた切つて捨ててここ」

拳治

「それは俺も同じだ。 手かとつととよこせパンが裂けるぞこの根
暗が」

真

「ならお前がまず放した方が良いんじゃねえのこの遊び人」

拳治

「…」

真

「…」

同時『オウ ラア アアアアアアアアアアアアアアアアアアツー！』

切れました。

「今日こそ決着付けてやるド根暗！」

「バラバラにして海に捨てたらド遊び人！」

その後、この二人がしばらく購買に立ち入り禁止になつたのは言つ
までもない。

若干冷える空氣の中、泉は歩いていた。
図書館で借りた一冊の本を抱えながら。

彼女自身本はとても好きで、主にファンタジーが好みらしい。

本の内容は、暗闇に包まれた世界を一人の勇者が切り開いて行くと言つシンプルな物だつた。
その本をしつかりと抱えて歩いて行く泉。

しかし。

「」たばんは、古畠泉」

彼女に夜が訪れた。

「はあああつ！」

渾身の力で空氣の弾丸を放つ泉。
しかしそれは、先ほど現れた声の主、ソフィイの呼び寄せる魔物によ
つて跳ね返される。

その魔物は以前拳治を襲つた時の物と同一。

違うとすれば、全身を覆うドロドロは黒ではなく赤。

その赤いヘドロは泉の能力『空気圧縮』^{エアバック}から生み出される空氣の弾丸が当たると一瞬で硬質化してしまう。

しかもその魔物が歩き出すたびに、地が焼け付く音がする。どうやら高温を帯びているようだつた。

状況は最悪。

勝算は低い。

今、泉に出来る事は、出来るだけ人の多い場所へ向かう事。

すばらしい。

この一言が、今のソフィを支配していた。

『アレ』でこの魔物『バリード』をここまで強化できるとは思つても見なかつた。

しかし、空氣系統、空氣圧縮部門の中級レベル『空氣圧縮^{エアバック}』の厚さ五センチの鉄板をえぐる破壊力を持つ攻撃をもつともしないこの防御力。

「すばらしい……」

しかし、それも束の間。

前方から来る雷撃に一瞬怯むバリード。

「雷撃……？」

「…え？」

今の雷撃は自分の物ではない。
しかも自分が傷をつける事も出来なかつた相手を祛ませるほどの力。

「こんにちは…」

それは転校生九条登だった。

問六 なぜめでたしへこ事は立て続けに起るのだ？（後書き）

この後は番外編を一つ

例題 1 番外編？なんで？（前書き）

答え P ∨ 200越え記念だから

例題1 番外編？なんで？

「… なあ 作者」

何じやいな

「これは何だ？」

そこには（祝 P.V.200越え記念）と書かれた看板がぶら下がっていた。

「蜘蛛の糸で吊るした割には結構持つな」

うん、かれこれ一時間くらいだ…

「……………」

でって何？

「いや、もういいだろ。それ取っ払って出てけよ
そんでソフィーと登の激闘の続きを書けよ」

いや、もう疲れてさ。

「なにこ？」

起きてるの？」

「寝ひよ」

「でも、おまえがどうしてそんなことを言つてんだよ。」

国語の漢字テスト9点でし、課題やんなきや いけないんよ。

「おれわせ」

でもさ、これの続きを書かなきやいけないじゃん？

「課題の方が大切だぞ？」

うるさいな、文字の塊のくせにいちいちチヤチヤ入れんな。

「チャツチャツチャ...」

轟
ツ
！

いいか、作者はこう見えて忙しいの？

「なんで最後「？」をつけたの？」

とまあ会話の寝たも尽きてきたといひで拳治クソヅハにか締めて。

「最後丸投げかよ…」

えつと...じゅあ

読者の皆さん、そして……そして？ 他は無いか？ まあいいや、えー、『愛讀』ありがとうございます。

これからもこの小説は作者の厨一スピリットで進んで行きます。
ソフィは何を成そうとしているのか？
泉と登はどうなるのか？

そして俺、拳治はどんな能力が隠されているのか？
きっと、見逃せない物語を描いて行くよう努力はするので
これからもよろしくお願いします。

これでいいか？」

良く出来ました。

では、皆さん。

これからも【僕らの力の使い方】をよろしくお願いします。

問七 全力疾走はなぜ疲れるのか（前書き）

答え 持久走なんてクソクラエ

「答えになつてなくね？」

問七 全力疾走はなぜ疲れるのか

「転校生…九条登…たしか貴方は中学等三年、風系統電気操作部門
『エレキパック』
『電気箱』」

ソフィイが登のプロフィールを語る中、登はそこまでは驚いていない。自分の経歴は調べれば簡単に出てくるだらう。

「もう一つアンタは『招来師』か…」

「…いかにも…」

ふふ、せつかく来ていただいたのですから…貴方にも実験台になつて下さい」

「実験台?」

「ええ…私の新しい…闇を」

瞬間、バリードはその口内に雷を溜め込み始める。それはすぐに一万Vを超える。登に放たれる。

しかし。

「いただきます」

それに向かつて片手を突き出すと、

その雷は瞬く間に登へと吸い込まれて行つた。

「さすがはエレキパック…一万Vをもろともしない」

エレキパックは、電気エネルギーを自分の体に蓄積し、それを自由に放出する能力。

しかし、それをソフィィは理解した上でそれを打ち込んだ。

「… わあ、実験を始めましょう」

すると、バリードはその巨体には似合わないスピードで

泉を狙い突進する。

それに泉の脳は理解はするも体が反応しきれない。

(当たるつー)

そう覚悟したが、そうはならい。

バリードの目の前から泉が姿を消す。

バリードは押さえきれずにそのまま壁に激突。

「……へ？」

泉はいつの間にか、登に抱えられていた。

「おっまえ…ボーッとすんな、死ぬぞー！」

「は、はい…」

登はふと自分の足下を見ると、自分の足に電気がほとばしっている。登はさつきの一瞬、自分の足に電気を流し筋肉運動を一時的に活発にさせた。

しかし、その代償はそれなりにあり、「明日筋肉痛だな」と小さく愚痴る。

「それにしても…」

登は少し離れた場所に面る、ソファイと化物を見つめる。

一見柔らかそうで実質は無茶苦茶固い外皮のバリー^{ード}。何を隠し持つているか分からぬソファイ。

それに比べ、ひかりはあまり役に立たなそうな泉^{くわ}に、完全に正体がばれている^{電使}。登^{風使}。

…あれ？ 勝算無くね？

とそこでバリー^{ード}が再び^二ひかりに向かってくる。

今度は腕を振り下ろす攻撃のようだが、ただ早いだけで攻撃は単調。よく見ればかわせる。

「つて、私を担いだまま何やっているんですか！？」

あ、わすれてた。

「ひどい！？ ついてないじゃなくて降ろして下せー…
そしてあの化物なんとかして下せー…」

「つて全部俺に丸投げ！？」

「む、無理に決まってるじゃないですか！ 私非力なんですよ…」

「いや、そう偉そうに言われても…」

とつあえず、泉の事はこの際無視する。

「しないで…！」

とつあえず状況をまとめよう。

「スルー！？」

登の扱える電圧はアバウト3億V。

しかし、貯め過ぎると体の制御が効かないため実際扱えるのは300万V。

貯めておいたのは150万Vでさつき吸収したのが、勘だが約1万V。

約151万Vでけりをつけなければならない。

はつきり言つてどこの無理ゲーとか嘆きたいがそんな暇も余裕も無い。

出来るなら一発。

この一発に全靈を掛けてやるしか無い。
ん？逃げる？

あの巨体相手じゃ体力が持たない。

「おいアンタ」

「は、はい？」

「来ませんね」

一度、木陰に入ったと思えばそれ以来出てこない。

その木ごと粉碎する手があるがあまりこちら側を手薄にするのは得策ではないと思いやめた。

何より、これは実験だ。

実験動物が早く死んでしまう実験ほど得られる物は少ない。
だからソフィーは待つ。

待つ。

ただひたすら待つ。

すんごい待つ。

待つ。

待つ待つ待つ待つ……。

「……………遅い」

そう愚つてしまつた。

「……………？」

ふと木を見やると、一人の女。
泉だ。

「仲間はどこにこきました?」

「え、えーと…………さよとトイレ……

「……………そうですか」

「はいー。」

そう自信満々に言つてのけるこの女はいろんな意味で将来大物にな

りそうだ。

しかし、いない者は仕方ないし。
目の前には待ち続けた獲物が居る。
仕掛けない事は無い。

「せえ…せえ…明日は絶対寝たきりだつ」

そう言いながら校内の階段を全力で上の登。
ダジャレじゃないよ？ ホントダコ？

一瞬だけソフィイが目をそらした隙に木陰から飛び出し、丁度開いて

いた窓から校内へ突入した。
ありがとう、窓を開け放しにした人。

拳治
「ぶえっくしゅん！」

真
「どうした？」

拳治
「あー、なんだろうな」

しかし、それで登の仕事は終わりではない。

目指すは屋上。

目標はソフィーの真上。

ソフィーは己の最強の一撃を食らわすために戦

「はああああああーー！」

一方泉は、こちらも全身全霊で戦っていた。

前眼に圧縮した大気をバリードに向けて打ち出す。

先ほどよりも目が慣れてきたのか、相手の攻撃を避けやすくなってきた。

余裕を持つて打ち出される空気圧縮弾は意外にも相手を吹き飛ばせる事がわかつた

隙だらけの胴体に打ち込まれた、弾はバリードをソフィイに向かって吹き飛ばす。

しかしそれをバックステップのみで回避するソフィイ。

こちらも随分と余裕のようだ。

「やれバリード」

するとバリードは再びその口内に雷を溜め込み始める。

それを見たとたん泉は全力で距離を開け始める。

さつきは登がいたから何とかなったが、はつきり言って今この状態で食らえば

最悪死ぬ。

「はあ……はあ……っ、付いた」

ようやく屋上に到達した登はすぐにその能力を発動する。チラッと横目で泉達を見ると、かなり危険な状態であるのは一目瞭然だつた。

だから登は急ぐ。

イメージするのは雷。
形作るは棒状の物。

そして、生まれる物は。

登の手に収まつたのは、雷を帯びたハンマーだつた

問八 なぜ主人公より目立つのか（前書き）

答え 今貴方は喧嘩中

問八 なぜ主人公より目立つのか

「はあ……はあ……」

泉は今も逃げては吹き飛ばし。

避けてはぶつ飛ばし。

しかし、そんな事がいつまでも続くはずが無い。

そして相手のスタミナは未知数。

かなり厳しい。

この校舎は小学生から受け入れをしているので無駄に高さがあり、
しかも一階一階の感覚が広い。

最悪、登が屋上に到達する前にこちらが力つきのかもしれない。

しかし、やるしか無い。

相手は命までは取らないだろうが、痛いのはヤダし。
なにより本当に命まで取らない保証は無い。

だから泉は避ける、逃げる。

時々ぶつ飛ばす。

「いっちょ本氣で…」

先ほど作り上げた雷のハンマーにむち打雷を纏わせる。これは登が今扱える電力のすべてを注ぎ込んでいるのだ。

そして登は懐から、こんな時のためにいつも所持している、鉄球を取り出す。

人に本気で打つのは初めてだ。

しかし、打たなきや、いっぢがやられるかもしれない。

だから迎え撃つ。

全力で。

登は屋上の手すりに足を掛け…

大きく跳躍した。

打ち合わせどうり、泉は登を確認すると。

出力を上げてバリーードを吹き飛ばす。

もちろんそれをソフィィはバックステップで避ける。

真上に上るが居る事を確認せず。

「最・大・出・力つ！」

すると、登は鉄球を宙に放り。

それを、真下へ。

ソフィィへ。

打ち込む。

すると。

それは、雷と共に。

またに落雷となつソフイへ。

すぐ後には凄まじい音とともに十煙が上がった。

「やつたか！」

なんとか、空中で体制を立て直した登は着地するかの煙の中を確認する。

「予想外の威力です…さすがはエレキパック…いえ、今のはエレキパックの力だけではないですね？」

絶望の声が響く。

ソフィィは、全く同じ場所に立っていた。
バリードは防御に回ったためか完全に腹を貫かれていた。

しかし。

彼女は立っていた。

剣を携えて。

問九 最後はいつも決まらないのはなぜ？（前書き）

答ええへ

「」まかしても駄目」

問九 最後はいつも決まらないのはなぜ？

「剣…？」

ソフィイは一步も動かず、その剣を構えていた。
最大威力で放った鉄球は無惨に真つ二つにされ、地面を抉っていた。
それを視界に入れた瞬間に登と泉に絶望が訪れる。

「危なかつたですね…これが無ければ私の負けでした。」

そう坦々と言葉を並べるソフィイは、腹に穴の開いたバリードを引つ
込め、一歩一歩近づいてくる。

死ぬ。

そう思つた…

しかし。

ソフィイは一人をそのままスルーすると、ゆっくり黒寮の方向へ進んで行く。

「え？」

一人はぽかんと口を開けてソフィイを見つめる。

「？……どうかしました？」

「え……いや……どうゆうわけないの？」

泉のその質問にソフィイは、できの悪い息子を見るよつた目で……「登）やめて。そんな目で見ないで」

「別に、貴方達を殺しても構いませんが……その前にやらなければならぬ事がたくさんあるのですよ……私には」

そつまつと、ソフィイは再びゆっくつとその場を去つて行つた。

「「まあ～……」」

ソフィイが視界から消えると同時に泉と登は大きなため息を吐きながらその場にへナへナと倒れ込んだ。

登に至つてはだんだん筋肉が悲鳴を上げてきた。

「し、死ぬかと思つた……」

そう言いながら登は泉の方を見るが、彼女は完全に意識が飛んでいた。

それをめぐらしく田で見ながら

「え? まさか」^泉れ運ばなきやならないの……はあ……」

伸び盛は立ち上ると、鼎を抱えて歩き出した。

一方職員室…。

「で？なんでここに居るかは分かっているな？」

そう知晃が凄まじい殺氣を放ち、しかし顔は天使のような笑顔で拳馬鹿真治に問いかける。

「漢字のまんまだ」

「ひらがなになつた！？」

「聞けえ！」

食堂の一人の喧嘩を止めるために出た被害が。

けが人 74人

そのうち学校職員 43人

被害総額 約400万円

二人のバカの夜は長い

問十 なぜいまなり日常に宋るのか（前書き）

答え 僕に聞くな！

問十 なぜいきなり日常に戻るのか

「では出席をとつます~」

はい、皆さん、存じ……存じ?

違うな、まだ一回しか出てないもん。

俺は青の寮長、秋本 原樹だい。

久しぶりに授業に出ている原樹。

久しぶりというのは、もともと寮長には仕事が『えられ、扱いはほかの教師と何ら変わりない。

しかし仕事が忙しく授業に出れないこともあるので、課題をこなせれば授業の欠席を出席扱いしてくれる制度がこの学校にある。

さて、久しぶりに授業に出了はいいが……

内容が全くわからん…

やつはこのひとはやつひの高校生と変わらないが…

早い…

早くやれ…

こんなにわが、みんなお馴染み杉崎 歩美です。

原樹のやつが授業に出るいしぐ、遊び相手がないため私も授業に出てみることにしました。

しかし。

…わかんない

…全然分かんない…

ついていける気がしない…

よし…寝よう

よーす。この話の主人公

牧野

拳治だ。

今回拳治も、久し振り…ではなくいつもどおり授業に参加。ところのも、拳治は「課題やるのめんどい」との一言でそれを破棄。当然授業に出なければ出席扱い、でなければ欠席。

そういう扱いで、寮の仕事も大変。

のはずなのだが。

拳治はそれさえも破棄。

もつ寮長を下されてもいいはずなのだが……

「拳治く～ん？なに独り言呟いてるのかな？電波人間？」

「『めんなさい、反省はします、後悔はしません』

「ちやんと謝れ！」

簡単に事情を説明すると。

……の、登です

今現在俺はベットの上にいます。

原因は全身の極度の筋肉痛です。

非常に厳しいです。

むしろ泣きそう。

昨日の戦闘で能力を使いすぎて全身ボロボロ。

なんとか家を部屋まで運び、自分の部屋につき。

即行寝た

そして朝

伸びをしただけで激痛。

その悲鳴に駆けつけたのは

「…………お前何やつてんの?」

拳治はベットの上でのたうちまわっている登を見つめる。その光景は実にシユールな…

「見てないで助け」 # % & \$, # \$ % , \$ % # \$, 「

叫ぶだけで死にそうになつている。

ギャグでなければ死んでいる。

それを楽しそうに見つめる拳治に思わずかてめえはと突っ込みそ

うになるが。

それをしたらまた激痛が走るし、なおかつ年上なためここは一応敬語で話さなければいけないのが社会のルール……

「ふふふ、のたうちまわれ……死に物狂いで生きるがいい……」

「死ねてめええええええあああああああああ痛てええええええええええええ！」

残念な感じである。

「こんにちは、泉です。」

私は今授業に出ています。

学年は年齢で決められ、クラスは10人ごとに寮や能力の種類で決

められます。

今は実技の時間。

「次、風系統空気圧縮部門 空気圧縮、エアパック 泉」

「は、はい！」

試験官が泉の名と部門を呼ぶ。

泉は全身ガチガチで手足が真っ直ぐピンとなつたまま歩く。じつに歩きづらい。

頭からは昨日の事などすっかり忘れたらしい。

内容は簡単で、ガラス瓶の内部にどれだけ空気を入れられるか、と

いの。

「痛つ！」

ガラスケースが吹つ飛んで顔面直撃。

それぞれの日常

問十一 なぜ主人公の設定が何となく明らかになるのか（前書き）

答え さあ？

「お前作者だろーー？」

問十一 なぜ主人公の設定が何となく明らかになるのか

「でもって、最近校内破壊率が高くなつてきてるからそりゃ」というをだな…」

「 ～ ～ 」

「ポリポリポリポリポリ」

「モグモグモグモグ」

学園内の会議室を借りての雑談。
もとい、第457回寮長会議が行われている。はず。

「誰も聞いたやいないな」

がんばつてまとめようとする原樹。

「え、ホントー? マジ!」

馬鹿でかい声で電話する歩美。

ケータイのストラップの量が半端無い。

「ポリポリポリポリポリポリポリポリ」

ポテトチツ スを食べまくつていいる真。
ああ、カスがボロボロ落ちて行く。

「モグモグモグモグモグモグモグモグ」

焼きそばパンにかじり付く拳治。

もひつ一度言ひ。

寮長達の寮長達による学園全体のための会議。
それが寮長会議。

すると。

「おひ、オメハーラやつているか

突如ドアが開きそこから知晃がやつてくる。
刹那。

「とこいつ訳で今日はこの校内破壊率をいかに減らすかが問題で……」

「現在の予算はどうなってるんですか?」

「そもそもなんで破壊されるんだ」

「俺とお前のせいだ」

一瞬で完全真面目モードに切り替わった寮長達。
馬鹿ども

そのスピードはまさに刹那の極みだった。

「で、なんで学校が破壊されてんの？」

切り出したのは真。

あの後知晃が帰つてからまた刹那のスピードでだらけた面々だが、
真はその話を持ってきた。

「ほとんどが」の前の前の前ひの血壁が原因だ

「うう…」

真と拳治は縮こまる。

「で、でも」の前の青寮に大穴が開いたのは温度干渉のせいだよな
?」

「おまえいい加減能力名で呼ぶのやめろ」

言い返したのは真で、言つているのは以前原樹がキレて歩美にぶつ放した氷柱の事。

しかし、それを言つていると寮長全員が破壊回数が多いので誰も何とも言えないが。

「いいじゃねえか。誰に迷惑掛かるわけでもねえし、俺はこっちの方が呼びやすい」

なら、同じ能力名の人物が複数いたらどうするつもりだ。という突っ込みを入れる人物はこの場所にはいない。

そこで原樹が。

「まあ何かあつたら拳治が片付けるという方針で」

「すまんがそこに行き着くまでの顛末を語つてくれないか?」

「……はあ……だからお前はいつまでたつても拳治なんだよ」馬鹿

拳治以外

「何」のシンクロ率。そして真は「の前ルビが「ばか」だったり

「そこ」は気にするな

と、ルビネタをしているところに歩美が割り込む。

「アタシはほら、戦闘に向かないからさアタシの能力」

「そんな事言いながらこの前能力で戦車作ってたけど氣のせいが質
イコグラヒティ
密重操作」

「うう…

あつさり真が玉砕した。

そこで今度は原樹。

「俺は寮長の仕事に忙しい」

「もめ」とを鎮圧するのも寮長の仕事だぞ温度干渉

「うう…

「舌打ちじやがつた

これもあつさり玉砕。

「じゃあお前はどうなんだよ」

切り出したのは拳治だった。

「俺か？俺の能力は闇統王だからなあ…不可能はない」

「それお前の自称だろ」

真の本当の能力は絶対死刑領域^{キルゾーン}と呼ばれるもので、真の周囲に黒球

を生み出しそれを飛ばす事でそれに触れたあらゆる物を「殺す」事が出来る能力。

しかし、真から一定の距離外に出ると黒球は消えてしまい。しかも真自身出現させられる黒球は10個のみ。

闇統王^{ダーカネス}は真のあだ名のよつなもので、真は自分の系統、闇属性の能力を全て平均的に扱える体质なのだ。

「俺のはやり過ぎるなんだよ、ぽんぽん使えるか^{オーバーキル}」

「なるほど」

拳治もよひやく理解し。

「……まともに対応できんの……俺？」

原樹や歩美を代表して真が一言

「がんばんな、幻想系統最強『現実上書』^{ナイトメア}」

なぜか、拳治が学校のもめ」と対応係に任命された瞬間だった。

問十一 なぜ主人公の設定が何となく明らかになるのか（後書き）

なんかさら～りと能力名が明らかになりました。

許してつかあさい

問十一 なぜ寮長達は戦闘描写が少ないのであるか（前書き）

答え 大丈夫、後半で全員戦う事になるから

「それネタばれ」

問十一 なぜ寮長達は戦闘描写が少ないので

幻想

現実にはない物事はあるかの様に思い描く事。

田の前の壁が邪魔なら打ち砕け。

自分に害成す物は切り裂け。

迫り来る害は吹き飛ばせ。

出来なれば思い描け。

イメージしろ。

想え。

全てを。

碎けぬのなら手を鋼に。

切り裂けぬのなら剣を生み出し。

吹き飛ばせぬなら風を巻き起し。

全ては俺の想^{お前}うまに。

それがお前の能力。

チヤーチヤーチヤラチヤ、チヤ、チヤ、チヤーチヤーチヤラチヤ、
チヤ、チヤ、チヤチヤチヤチヤチヤチヤチヤチヤチヤ、チヤ、チヤ、チヤ、チ
ヤ、チヤ：チヤン

ラジオ体操のアレ

なんの風の吹き回しか歩美は早起きして、寒い中ラジオ体操（CD）

を初めっていた。

その隣には拳治、登、その他赤と白の寮生達数名が、眠をつけたままで無理矢理開いていて。

ところの、昨日の夜。

談話室で寮の女友達と一緒にテレビを見ていたところ。

『朝に軽い運動をすると直行が良くななり頭が通常より早く目覚めるところ……』

ところの、何かの健康番組で怪しげなおばちゃんが話しているを見ていたのだ。

ちなみに制作会社が『眉唾プロダクション』となっていたのは気にしない。

提供が『ネズミ肉専門店』とか『怪獣小売店 レット・キング』となつていたのも気にしない。そして意味が分からぬ。

そんなまことに眉唾物を見て、歩美は。

「そうだ、ラジオ体操をしよう」

「京都行くみたいに決めるのか」

拳治の部屋で自分の意見を唱えていた。

ちなみに原樹の部屋で同じ事をしたら貼り倒されて廊下に捨てられた。

「いいじゃんいいじゃん。あたしはどうせ一日もたら飽きてやめらるー」

「結果が見えるのならやるなよ。あと俺は基本ボケ役だからな。突っ込みじゃないからな読者の諸君」

と言いながら拳治が画面越しに貴方の顔を見つめているのを想像すればいいと想う。

しかし、そんな拳治の言動を無視して、歩美は持ち込んだバックからラジカセを取り出しがち

「うひーひーやんのー!?

「へ?.

「あ、いや…そんな『何当たり前の事言つてんの?』みたいな顔やめてくんない?」

「やめてくれない」

「うん…とつあえず片付けて」

そう言われ歩美は仕方なくラジカセをしまった。
そして。

「とりあえず…ラジオ体操について何か知っている事があつたら提供しなやこ」

「知らねーのかよー!..」

というわけで

三

とりあえず元気一杯にラジオ体操にいそしむ歩美。
名。 眠い目を赤くなるまで擦つてふらふらしながらラジオ体操する他数

「なんか疲れたな」

なんて愚痴をこぼしながらラジオ体操する歩美。

ラジオ体操に若干やる気を出してきた他数名。

二
三
四

」
」
」
」
」
」
」
」
」
」

完全放棄な歩美。

元気一杯にラジオ体操する他数名。

「突っ込まないよ? 突っ込んだら負けだよ?」

所変わるが、ここは廊下。

詳細に説明すると、中学塔から高校塔に繋がる渡り廊下だ。はつきり言って、生徒は他の学年にはあまり興味を示さないので、ここを利用するのは教師か、もしくは他学年にラブレターを渡しに行く女子生徒くらいだ。

そんな廊下を通っているのは、みんな「存知数学教師知晃ちゃん？」（黒）

知晃教諭で「やつます」めんなさい。

その手には補習用のプリントと拳銃の仮通知表。

今月に入つて三回目となる補修。いい加減知晃も飽きては来たが、ここは義務教育なので見捨てるわけにも行かない。

義務でなければとっくに切り捨てているが。

と考え事をしてくると、前から他の教師がやつてくる。

手にはここからでは詳細は分からぬが、何かの会計報告書だらうか…が握られていた。

「渡辺先生…」

そう君の悪い声で話しかけてきたのは、黒い髪を後ろに束ね、度が強そうな眼鏡をかけている、名前は…『水面聖』だつただろうか。

「なんですか水面先生」

この気味の悪い教師は知晃も苦手である。

『も』と言つのは、教師の間でも気味の悪い方で、宴会は誘つ事は無いし、それ以前に参加しようともしない、時々小さく笑う、などから気味悪がつて近づかない者が多いのだ。まあ言わないが。

すると聖はその手にある会計用紙をこちらに見せてきて。

「今回の『貴方達』の飲み会の領収書が回ってきたんですが……落とすんですか…経費で…」

無駄に貴方達を強調していく…むかつぐ。

「さあ、私は自分の分はちゃんと払つたんで詳しい事は分かりません…が、私ならその領収書は破り捨てますね」

「そりですか」

そう聖は感情のこもらない声で言つてへる。
そのまま何も告げず歩き出した。
知晃も、これ以上は話す事は無いので歩き出す。
これで終わりだと思った。

「もうすぐ革命が始まりますよ……大きくて暗い、全てを巻き込む
革命がね」

知晃はその言葉に歩みを止めた。

振り向くと、聖も同じ様に止まってこちらを向いていた。顔色ひとつ
を変えず。

「どうこう意味で？」

「そのままです」

「それはこつ起ころ

「近い未来」

「……貴方は私を試していますか？」

「お好きな様にどうえて下れー」

「なぜそれを私に教えたのですか？」

その質問に聖はしばし止まり。

「…………その革命は私に取つて邪魔なんです。でも貴方ならそれを
阻止する当りがありますよね？」

その答えに知晃に4人の寮長浮かぶがすぐに打ち消す。
馬鹿
彼らは寮長という役を背負つているが、まだ子供だ。

「邪魔なんですか」

「ええ」

「その革命を止めれば終わりですか？」

「いいえ、それが終われどもすぐに新しい革命が始まります」

「……その中に立っているのが貴方という可能性は？」

「信憑性がありませんねえ」

「否定はしないんですね」

「ええ」

「なら……」

知晃が聖を睨みつける。

「（）で潰しても構いませんか？」

それに聖はクスリと笑う

「可笑しいですね、貴方はもう少し冷静な方だというのが私の評価ですが…」

それに知晃も笑う

「俺ははつきり言ってその全てとやらが国だらうが世界だらうがどうでもいいが…（）は俺『たち』の家なんだよ」

睨みつけながら一歩ずつ近づいて行く。

「（）の学校に居る生徒は俺の子供みたいなもんだ……だから俺の生ガキ共

徒達に手を出したひ……殺す

「できますか?」

「せめてみる価値はあるっ。」

その日、渡り廊下は粉砕された。

題十二　歯せ間に勝てぬだいわか（前輪也）

答え 黒く塗つたばかりである

問十三 風は闇に勝てるだりつか

「はああああ～」

と盛大なため息を吐きながら補修室で待機する拳治。

數十分前にここに呼ばれ。

「ちょっと教材忘れたから取りに行つてくる…
いいが、うわいわするなよ。ここにいる

そう、そう言われてから數十分。

「おせーなー…」

いい加減足が棒になりそうだ。

教材とともに鍵も忘れたらしく、教室も開いていない。

「はあ…こいつその事『事故でも起つて補修無し』になんねえかな
あ～…」

チュドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオン

卷之三

所少し変わりここは渡り廊下……

だつた場所。

その場所にいた知晃はすぐさま外に飛び出し、エアハンマーの能力で空気を固め足場にし、校庭側に移動する。

それもなるべく早く。

「つたくなんつー破壊力だよ…」

そう愚痴をこぼしながら後ろを向く。

そこには全身真っ黒な装甲を着込んだ聖が『宙に浮いていた』。

「たしか……『ブラックバトラー闇夜叉』だったか…」

地面に降り立つた知晃が聖にそう問い合わせる。

すると、聖はゆっくりと空を移動しながら。

「ええ…闇属性闇装甲系統の上位能力です」

その言葉から知晃は自分の頭の古い引き出しを開けてそれに關する情報を引っ張りだす。

闇装甲系統の能力は発動中、闇から作り出す武器を装備するという能力。

上位になればなるほど一度に装備出来る数は上がっていく、威力も増していく。

そのなかでも闇夜叉は、その能力の最高峰能力。
闇属性の肉弾戦最強の能力といわれている。

ブラックバトラー

それに比べて「ひらはただ空氣を圧縮したり固めたりするだけの能
力。

「分が悪すぎるだろ…」

「ならおとなしく降参しますか?」

「アホか、俺は今から補修授業を取らせるジバの馬鹿よりも負
けず嫌いでね」

「私は生徒達にこれから革命を起しる革命を止めてくれればそれで
いいのですが」

「言つたろ?ガキは不参加だ」

「そうですか……なひ」

聖は闇を片手に集め武器を生成する。

「貴方が死んでくれれば少しばら危機感を持ちますかね?」

生成されたのは。

四連口ケットランチャー。

「つて、ちよ、近代兵器なんてあつかよーー。」

それを容赦無く知晃に向かつて連射しまくる聖。

「あぶねえ！？？」

ロケットランチャーが地面を抉りまくる。

「つとあぶねえ！」

抉る

「つてか反撃くらこさせ…」

抉
る

「ああああああああああああああああ」

泣いた。

事自体が奇跡である。

しかし、一応知晃も人間なので限界がある。

「くつそが…！」

すると知晃は懐から、黒いＬ字型の物体。それを人は銃という。

「貴方、銃刀法違反で捕まりますよ？」

「あほか、そんな事百も承知だ……よ。」

銃…正確には強化されたエアーガンなのだが…を聖が放つ弾頭に向
け、トリガーを引く。

すると、ベコン…という音を立てて穴が空き、弾頭は宙で破裂した。
「なるほど、それは音からしてただのエアーガン…貴方の能力で威
力を極限まで強化しているのですか」

「御察しがいいですな！」

すると知晃はその銃を聖に向けて放つ。

しかし、ただの空氣の弾にすぎない弾丸は闇の装甲によつて弾かれ
る。

が、弾かれた弾丸が地面に被弾するとその部分は小さくえぐれる。

「……すばらしい威力…これほどの空氣使いはそうはないでしょ
う」

「ほめても何も出ないぜ？」

すると今度はパチンコ玉サイズの鉄の弾を取り出す知晃。
それを素早く装填し。

しかし、聖もただ見ているわけにはいかなかつた。
四連口ケットランチャーを消し、片手に盾、もう片手に剣を取り出
す。

そして装填がおわった知晃はそれを聖に向ける。

しかし、それを見ながらも聖は前に出る。

しかも走る。盾を前に構えながら。

その盾で攻撃を防ぎながら全身し、近づいたら切る。

それで終わり。

知晃が打ち出す。

それは聖の予想を超えて剛球となつて聖の盾を弾く。

「！？」

「余所見している暇無いぞ」

盾が無くなり、無防備になつた聖を撃ちまくる。

聖の鎧を凹ませしていく。

当たらなかつた鉄球は地面を深く抉る。

弾切れを起こせば素早く弾倉を交換する。

「はあ……はあ……はあ……」

全弾撃ち終わると、そこには相変わらず装甲は被つたままだが、うつぶせに倒れている聖の姿。

「…………まあ、革命とやらは止めにしてやる…………でも、ガキ共に手を出したら、そのドタマがぶち抜いてやるからな」

そう言い残すと、知晃はその場を後にして聖に背を向ける

カシャン

「！」

とつさに知晃は振り向く。

しかし、次には横つ腹に走る激痛。

「こっつ……！」

その場につづくまる知晃。

完全に油断していた。

目の前には、先ほどと変わらぬ。

否、さつきよりも重装備になつた聖が目の前にいて。

知晃が放つ鉄球の嵐はこの装甲に全て弾かれていたらしい。

「43点……残念ながら課題点ですね…………しかし、貴方に再テスト
はありませんよ」

そう言いながら聖は、先ほど出した剣よりも、もつとえげつないサイズの大剣を掲げる。

「…………やば、しくつたか」

殺されない。

そんな甘い考えはこの男の前では適応されないだろう。

痕跡を消され、自分は他校に転勤扱いになるだろう。

終わった。

「…………あ、補修忘れてた……」

「自覚してゐなうさう」と来いよ」

「先生に見てもらわなければならぬ課題がたくさんあるんですが
……」

刹那。

冷氣が辺りを包み込んだと思うと、次に現れたのは氷の柱。しかも特大サイズ。

それが聖に向かつて飛んでいったと思うとその大剣を簡単に吹き飛ばす。

知晃は突如現れた人物に顔を向けると。

「……補修は、チャラにならないぞ？」

「うへえ、マジで」

「今の登場の仕方ではねえ」

そこには、青の寮長原樹と

白の寮長拳治が並んでいた。

題十三 風せ闇に勝てぬだれつか（後嵯峨）

私は謝らない

「何があった」

問十四 主人公達がピンチの時に遅れてくるのはデフォルトなのだろうか（前書き）

答え デフォルトなんです

問十四 主人公達がピンチの時に遅れてくるのはソフトフォルトなのだらうか

「遅かつたな……」

「まあまあそう言わずに」

若干キレ気味の知晃を拳治はなだめる。

しかし、そうやって「冗談をかましていられるほど知晃は余裕は無い。

れっきの一撃で血管が何本がいつているのだ。

これほどの怪我は、能力で再生させないと危険だ。

しかし、相手は闇系統の接近戦で最強を誇るブラックバトラー。

逃げるのは至難の業だった。

「拳治」

「んあ？」

知晃は拳治を名を呼ぶ。

それに拳治は適当に相づちを打つと、適当な距離に近づいた。

「やれるか?」

その間に拳治は。

「任せんシャイー!」

ぐいっとサムズップを知晃に押し付ける。

「戦闘中に余所見とは… 余裕ですね」

その言葉と共に響く爆音。

今度は聖が投げた手榴弾が炸裂する。

その場所は確実に拳治達をとらえていた。

「さて知晃先生、これで形勢逆転ですよ?」

今の一撃で、新手は行動不能にした。

もちろん殺しはしていない。

彼らにもこれから色々してもらなわなければ……。

しかし。

「で?」

その煙の奥から声がする。

その声は明らかに知晃の声ではない。

聖はその煙の奥を見つめる。

「形成逆転にはまだ早いんじゃないかい?」

巨大な氷の壁。

それを生み出した者は他でもない原樹だった。

「まあ、これで俺の出番は終わりですよ。知晃先生を保健室に連れて行かなきやならないんで」

「逃げられると思つてゐるのですか？」

「無理ですよ、俺だけの力じゃね……」

その言葉と共に氷壁がぶち破られ、その中から丸腰の拳治が飛び出す。

それに聖はひとりに呑ませ、後ろに飛びながら銃を形成しそれを急所を外して発砲する。

しかし。

ガキンッ！キンッ！キュインッ！

「なつ！」

聖は驚愕の表情を浮かべる。

なぜ？

彼の体は聖の放った弾丸を全て受け付けず、弾いてしまった。

しかし、拳治は聖に驚く暇をとらず拳を前につきだす。

回避が不可能な事を悟った聖はそれを盾を生み出し受け止め……。

「グッ……」

その拳はガードごと聖を吹き飛ばす。

吹き飛ばされた聖は、空中で体制をたてなおし、地面に着地。

「あなた…………いつたい何者ですか？」

聖は今の攻防だけすでに混乱していた。

体を硬化する力は土系統に属する能力で、腕力強化は風系統。
聖のガードも柔いわけではない。

その上から吹き飛ばす力はおそらくかなり上位クラス。

そんな複数の系統を別々に操る事など出来るわけがない。

そんな聖の心境を知つて知らずか拳治はにやりと笑みを浮かべ。

「白の寮長、幻想系統幻想実現化部門…牧野拳治だ」

静かにそう宣言した。

問十四 主人公達がピンチの時に遅れてくるのはソフトウェアのだらうか（後書き）

拳治「今日は随分やつつけ作業だったな」

いろいろあんだよ

拳「色々とは」

あたらしいゲームにはまつたり…（殺

拳「一応言つておきますが、まだまだ続きます」

あとラガン！

拳「ラガン？」

今度会つたら覚えてるよ…

拳「何が？」

例題二 大晦日の反省会

例題二 大晦日の反省会

最近寝不足気味の忍者（以下忍者）

「というわけで、大晦日の大反省会を始めます」

パフパフボフボフモフモフ

「なんか効果音が柔らかかったぞ？」

拳治が突っ込みを入れるが忍者はおかまい無しに進めていく。

さて今回は皆さんに適当に飲みながら喰いながらこの大晦日を越したいと思います。

「それ忘年会じゃないのか？ 忍者の「」がなくなってるが？」

気にしない、気にしない。

それではエントリーナンバー1番！

「なんのだよ」

牧野拳治さんより何か適当に歌つて下さい。

「アバウトだなおい… んじゅあ… ウルト マンガ アより」

せつぜい。

「逆転のクアン ムストリームで」

それBGMだから歌いたくない。」

「俺音痴だから歌いたくない」

でわでわHントリーナンバー4!」

「飛んだな」

ソフィイさんより何か歌つて下さい。」

「断る」

「……」

……。

「…………だんだんグダグダになってきたな」

じゃあしめるか。

「早ー」

なんやかんやでお氣に入り件数が3件になつたつとの「僕らの力の使い方」を読んでいただき誠にありがとうございます。本当に今回は聖と拳治のバトルを終わらせん予定でしたが、少し

「ずつ話が大きくなつてこつなりますた。
すんません。

「これお前ただの懺悔じゃネエか！」

さてさて。

「無視か！」

個人的に続きが気になる様には仕上げてこる「つもり」ですがいか
かでしようか？

とまあこんな事グダグダやつている暇があつたら早く続きを書けと叩
かれそなんで、今日はこの辺で。

じゃあ拳治締めろ。

「ほいほい

それでは感想などがありましたらじっくり応募ください

テレビか。

「今なら拳治君ストラップを抽選で800000000000名様に

…」「…

無理だ。

てか八百億つて…

「ティッシュが

こねえよ。

「作者からのお返事がきました」

くるわー……来るよ。

「やれでなあやん」

「以上!」以上!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7363x/>

僕らの力の使い方

2011年12月31日16時54分発行